

新潟県（越後国）の挽物製品について

水澤幸一（新潟県胎内市役所）

はじめに

県内の主な挽物出土遺跡として、中越の八幡林遺跡で約40点、箕輪遺跡で約100点、下越阿賀北の清水潟北岸一帯の遺跡群で約200点（船戸桜田遺跡100点、船戸川崎遺跡30点、青田遺跡16点、中倉遺跡14点、草野遺跡13点、屋敷遺跡10点、蔵ノ坪遺跡8点等）が出土している。その他、新発田市・阿賀野市・加茂市・新潟市等下越の低湿地遺跡からの出土も認められ、県内全体では350点以上となる。ほとんどが河川跡からの出土である。なお、なぜか国府所在地の上越では、ほとんど報告されていない。

以下、以前に行った研究（水澤2002・2007・2020）をもとにみていく。

8～10世紀の挽物製品

挽物の種類は、有台盤・無台盤・椀・鉢・蓋等で、有台盤・無台盤・椀等の漆器が、全体の1割ほどを占めている。無台盤が6割以上を占め、有台盤を合わせると9割近くとなる。

まず、器種分類を行い、その帰属年代を示す。年代は、図9（春日1999）に準ずる。

（1）白木製品

無台盤（図1） 最も出土点数が多い。I類～VI類に分類した。

I類 体部の立ち上がりがわずかなタイプ。口径25cm以上の大きなものが多い。III～V2期頃まで。

II類 体部が屈曲し、底部との境が明瞭なもの。V類に次いで多い。IV2～V2期。

III類 体部外面中位の削りの角度を変えるため、体部が屈曲するもの。V1～V2期。

IV類 III類と反対に、体部内面中位に屈曲をもつもの。III類よりは多い。V2～VI2期。

V類 体部が外へ開くタイプ。底部と体部の境が丸みをもつものが多い。最も出土例が多い。I類の発展形態で、V1期から認められるが、II類が衰えるVI1期以降主体となる。VI3期まで認められる。

VI類 体部の屈曲が強く、器高が3cm以上と深いタイプ。類例は少ない。V2～VI1期。

有台盤（図2） 形態差が著しい。I類～X類に分類した。

I類 体部の立ち上がりがほとんどなく、短いもの。無台盤I類に対応するものである。IV1～IV2期。

II類 無台盤に最も近いが、側よりの削り込みが認められ、高台を意識したと考えられるもの。いわゆる総高台である。内削りは、ほとんど認められない。多くのバリエーションがある。IV3～VI1期。

III類 無台盤IV類に側から削り込みを入れたもの。器高は、5cm近くある。V2期。

IV類 明確に低い高台を削り出すもの。IV2～VI1期。

V類 太く高めの高台に、屈曲して短く立ち上がる体部がつくもの。IV3～V2期。

VI類 V類に近いが、底部を厚く（2.5cm）削り残し、器高がやや高いもの。V2期。

VII類 II類の底部に高く太い高台が付されたもの。VI1期か。

VIII類 細く高い脚部がつくもの。体部は屈曲する。口径の大きいものが多い。IV3～V2期。

IX類 体部が水平ぎみに開くもの。底部は、総高台状を呈するものが多い。体部が短いものと、比

較的長いものがある。X類とともに最も新しく現れてくる器形である。VI 2～VI 3期。

X類 水平に短く開く体部に、厚い底部がつくもの。VI 3期。

蓋（図3） I～III類に分類した。他に壺類に伴う小型蓋がある。

I類 つまみが輪状で、端部を折り曲げる形状のもの。IV 1期。

II類 つまみが擬宝珠形で、端部を折り曲げる形状のもの。V 2期。

III類 つまみが肥大化した擬宝珠形で、端部内面に段（かえり）を有するもの。V 2～VI 1期。

稜椀（図3） 総高台ぎみの高台から体部が内湾ぎみに立ち上がり、口縁部外面をえぐって体部中位に稜をつけたもの。V 2期。蓋III類と組になるものと思われる。なお、より端部を外反させたものが、船戸川崎遺跡の南方2km弱の新発田市青田遺跡の川跡より出土している。

小椀（図3） 口径12cm前後を測る小型椀で、総高台の底部が斜に開くもの。口縁端部内面に、やや丸みをもたせている。VI 2～VI 3期。

椀（図3） 総高台ぎみの底部から体部が直線的に斜に開く。口縁は、直に収めるものと端反りがある。米沢市古志田東遺跡（手塚2001）では、口縁端部が外反ぎみのものが多くを占めている。IV期からみられ、VI期以降は端反りタイプのものが主体となり、11世紀代まで続く。

無台杯（図3） 漆器杯I類に対応するもの。V 2期。

有台杯（図3） 底部を低く削り出し、体部が直に立ち上がるもの。口径は、10cm前後。VI期。

鉢（図3） 無台で体部が大きく開くものと、有台で端反りのものがある。口径25cm前後。V 2期～VI期。

（2）漆器（図3、壺を除く）

漆器無台盤

I類 無台盤I類・II類に薄く漆を塗ったもの。III～V期。NA3（289）は、丁寧なつくりである。

II類 胎が非常に薄く、厚めの漆をかけるもの。身は深く、斜に開く。VI 3期、10世紀に入る。

漆器有台盤 有台盤IV類に薄く漆をかけたもの。IV 3期。

漆器皿 浅身で、口縁が反りぎみに開き、小ぶりの高台が付く。VI 3期。

漆器杯

I類 胎が全体に薄く、体部が内湾ぎみに開く。内面の口クロ目が顕著である。V 2期。

II類 底部が厚く、体部が直に開く。I類を在地で写したものと思われる。V 2期。

漆器椀 総高台ぎみの底部から体部が直に開き、端部を反りぎみに収めるもの。VI 2期。

壺（図6） 八幡林遺跡でのみの出土である。IV 1期。

なお外に、鞍の漆器片が船戸川崎遺跡4次調査で出土している。

（3）各器種の消長

次いで、上記分類器種の消長を示す（図4）。ここから知られることは、8世紀後半のIV 2期に入る頃から器種が多様化し、それがピークに達するのが9世紀前半のV 2期を前後する時期で、VI期以降盤が減少し、椀がめだってくることがわかる。この多様化し始める段階は、越後国北辺において爆発的に遺跡数が増加する時期であり、官衙的な遺跡が各地で認められてくる時期である。そして挽物製品は、それら官衙でのみ必要とされ、生産された器物であるといえる（中村2002、水澤2005）。

文字資料からみると、船戸桜田・船戸川崎遺跡では、「木」の墨書土器とともに前者では「木」の焼印が押された盤が2点出土している。また、「麻績部」（木簡：FS2）の存在は、信濃や上野等の越後国外からの移住者を表していようし、それに「三宅」（墨書須恵器：FS4）や「守部」（木簡：FK4）といった在地の富豪層や、国司の「少目」（木簡：蔵ノ坪遺跡、新潟県教委2002）がかかわっ

ていることから、この時期にかなりの移住者（開拓者）があったことが想定される。それは、この時期にいたって、不毛の湿地帯が水運による交通体系の整備によって新生したということができよう（水澤 2005）。

（4）無台盤と有台盤の時期的な口径の推移

図5は、両者の口径（mm単位切り捨て）を表に落としたものである。なお、口径が不明なものは、高台径に2cmを足した数値で記してある。また、出土点数が非常に多い船戸桜田2次調査のみは、1～3段階とその外の4つに分けて示してある。

一見してわかるのは、VI1期以降の所産であるFS2の3段階、FS4・5、FK2で口径24cmを超えるものが出土しておらず、VI2期には口径20cmに満たないものがほとんどを占めるということである。前段階のV1～V2期では、20～23cm台の製品が中心であり、時期を遡るごとに口径が大きいものが中心となる。IV1期の八幡林遺跡H地区例（和島村教委1994）では、図示された8点中6点が口径25cmを越えている。

それらは、畿内でも認められるところであり（町田・上原編1985）、全国的な変化である可能性が高い。ただし、提示された畿内の資料は、8世紀後半の資料群（平城京・長岡京）のみであるため、その時期にあたる大型品がほとんどを占めている。また、「皿か」とされた平城宮出土の2513は、蓋I類と思われる。

次いで、7世紀末～8世紀前半代とされる山形県東置賜郡高畠町の大在家遺跡出土挽物では、有台器種の占める割合が高く、口径20cm前後のものが多かった。また、漆器も有台盤・無台盤が各1点以上出土している（高畠町教育委員会1998～2001、実見）。

以上の様相をふまえて再度まとめると、盤の口径の変化は、土器のそれに連動している可能性が高いものと思われる。IV1期の八幡林遺跡H地区例（和島村教委1994）では、口径25cmを超えるものが多く、V1～V2期では、20～23cm台の製品が中心となり、VI2期以降口径24cmを超えるものが出土していない。そしてVI3期以降は、庄内の上高田遺跡（山形県埋文1995・1998）や興屋川原遺跡（山形県埋文2010）、古志田東遺跡（米沢市教委2001）、払田柵関連の厨川谷地遺跡（秋田県教委2005）にみられるように有台盤IX・X類や椀が中心となっていく。

したがって、8世紀代に入り、土器様式に連動して木盤も口径を拡げ、9世紀には小型化していくことがわかる。それは直接的には、盤の上に数点の食器（土器）が置かれたことを意味しよう（その点、仲田茂司氏の復元想定された食膳における使用形態（仲田1993）とは、異なる）。すなわち木盤は、後代の折敷に相当する器種であり、その出現・普及に伴い、消えていったものと考えられる。したがって同じ挽物でも、10世紀後半以降に普及してくる漆器椀類（水澤2007）とは、性格を異にする器種であると考えられる。

なお、11世紀以降の漆器については、当日資料及び図7・8を参照のこと。

小 結

以上、越後の8世紀から10世紀までの挽物製品を中心に概観してきた。

奈良～平安前期の主な器種である木盤は、土製食器を置く台であり、その役割は後代の折敷に引き継がれていった。また、漆塗りの盆もその後継である。

そして、10世紀以降に増加してくる椀・皿類は、11世紀以降漆器が主体となり、食膳具の主体的役割を（日本海沿岸地域では貿易陶磁とともに、それ以外の西日本では土器に組み合わされて）担うようになっていったと考えられる。

参考文献

- 秋田県教育委員会 2005『厨川谷地遺跡』県文化財調査報告 383
- 飯塚武司 2000「古代手工業生産における木工」『考古学研究』47-3
- 宇野隆夫 1996「木製食器と土製食器－弥生変革と中世変革－」『古代の木製食器－弥生期から平安期にかけての木製食器－』第39回埋蔵文化財研究集会資料、石川
- 春日真実 1996「新潟県の概要」『古代の木製食器』第39回埋蔵文化財研究集会資料
- 春日真実 1999「土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 春日真実 2000「古代・中世における挽物・曲物の変遷」『大武遺跡（中世編）』新潟県埋文調査報告 97
- 春日真実 2001「柏崎市鶴巻田遺跡出土漆器の編年的位置」『新潟考古学談話会会報』第23号
- 川畠 誠 1994「石川県内出土の木製食器・容器に関する覚書」『北陸古代土器研究』第4号、石川
- 川畠 誠 1996「北陸地方の木製食器の概要」『古代の木製食器』第39回埋蔵文化財研究集会資料
- 川畠 誠 1997「木製食器からみた9世紀」『北陸古代土器研究』第6号、石川
- 品田高志 1997「北陸における古代と中世の木製食器」『北陸古代土器研究』第7号、石川
- 高畠町教育委員会 1998～2001『文化財年報』vol. 2～5
- 中条町教育委員会 1997『下町・坊城遺跡II～川跡出土の遺物～』町埋蔵文化財調査報告第12集
- 中条町教育委員会 1999『中倉遺跡3次』町埋蔵文化財調査報告第16集、新潟
- 中条町教育委員会 2001『船戸桜田遺跡2次』町埋蔵文化財調査報告第22集
- 中条町教育委員会 2001『下町・坊城遺跡V（C地点・総論編）』
- 中条町教育委員会 2002『船戸川崎遺跡4次』町埋蔵文化財調査報告第24集
- 中条町教育委員会 2002『船戸桜田遺跡4・5次 船戸川崎遺跡6次』町埋蔵文化財調査報告第25集
- 仲田茂司 1993「東国古代の挽物－食膳における土器との補完完形－」『考古学研究』39-4
- 仲田茂司 1999「東国中世の漆器」『考古学研究』46-1
- 中村 弘 2002「袴狭遺跡出土木皿の検討」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第2号
- 新潟県教育委員会ほか 2002『蔵ノ坪遺跡』県埋文調査報告 115
- 新潟県教育委員会ほか 2003『浦廻遺跡』県埋文調査報告 126
- 新潟県教育委員会ほか 2004『青田遺跡』県埋文調査報告 133
- 新潟県教育委員会ほか 2006『大坪遺跡』県埋文調査報告 153
- 新潟県教育委員会ほか 2006『住吉遺跡』県埋文調査報告 157
- 新潟県教育委員会ほか 2015『箕輪遺跡II』県埋文調査報告 254
- 新潟市教育委員会 1993（2000）『新潟市の場遺跡』
- 町田章・上原真人編 1985『木器集成図録 近畿古代篇』奈良国立文化財研究所史料第27冊
- 水澤幸一 2001「折縁坏とその背景」『新潟考古学談話会会報』第23号
- 水澤幸一 2002「古代の挽物製品について」『船戸桜田遺跡4・5次船戸川崎遺跡6次』中条町埋文報告 25
- 水澤幸一 2005「潟街道の遺跡群」『古代の越後と佐渡』高志書院
- 水澤幸一 2007「越後の中世漆器」『新潟考古』第18号
- 水澤幸一 2009『日本海流通の考古学－中世武士団の消費生活』高志書院
- 水澤幸一 2011「北辺にとどまるモノと越境するモノ」『古代・中世の境界意識と文化交流』勉誠出版
- 水澤幸一 2020「古代 木製容器」『新潟県の考古学III』新潟県考古学会
- 山形県埋蔵文化財センター 1995『上高田遺跡・木戸下遺跡発掘調査報告書』調査報告書第25集
- 山形県埋蔵文化財センター 1998『上高田遺跡第2・3次発掘調査報告書』調査報告書第57集
- 山形県埋蔵文化財センター 2010『興屋川原遺跡』県埋文調査報告 187
- 四柳嘉章 1997「北陸の漆器概説」『北陸の漆器考古学－中世とその前後－』第1分冊、第10回北陸中世土器研究会資料
- 米沢市教育委員会 2001『古志田東遺跡』市埋文調査報告 73
- 和島村教育委員会 1992～1994『八幡林遺跡』埋蔵文化財調査報告第1～3集、新潟

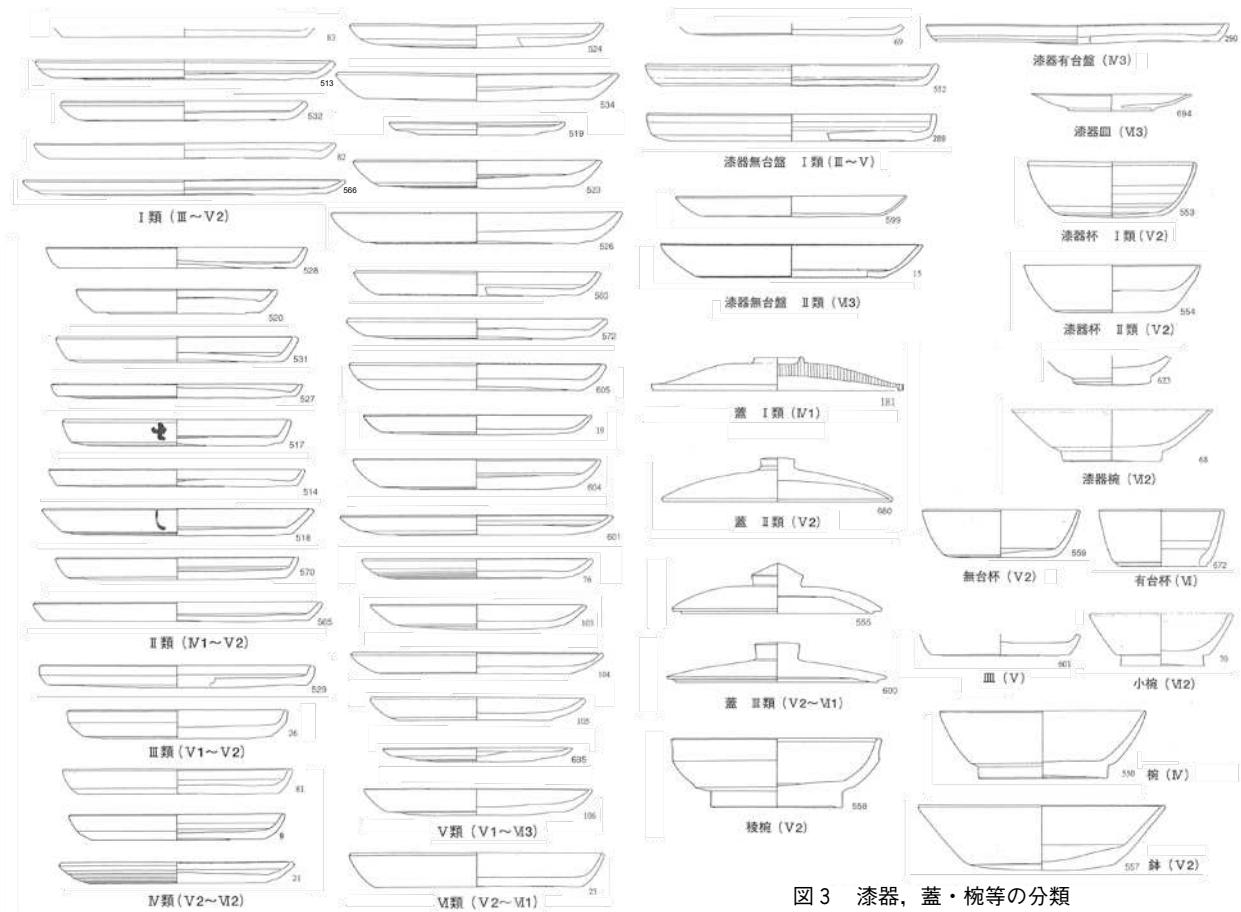


図1 無台盤の分類

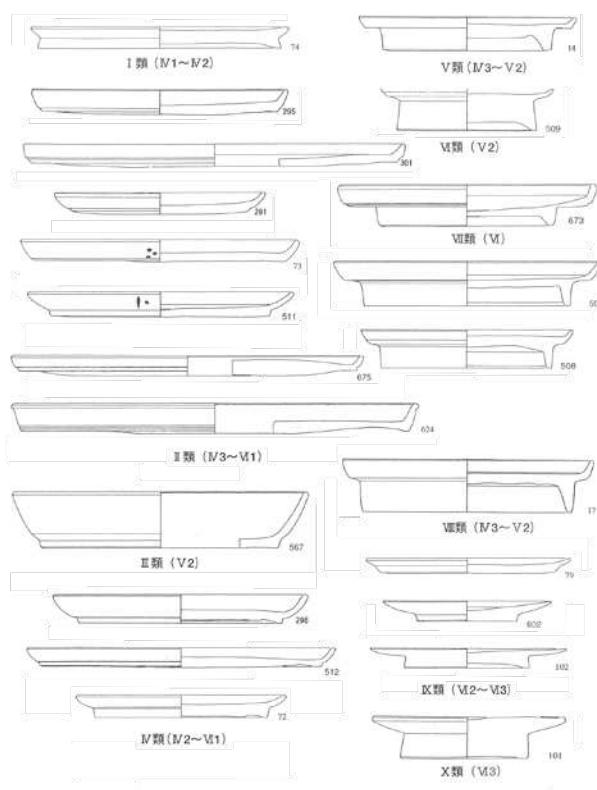


図2 有台盤の分類

分類 時期	木地製品												漆器															
	無台盤			有台盤			蓋			接			無台杯			有台杯		小鉢		大鉢		無台盤		有台盤		杯		碗
I	II	III	IV	V	VI	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	I	II	III	接	無台杯	有台杯	小鉢	大鉢	無台盤	有台盤	杯	碗	
III 1																			接	無台杯	有台杯	小鉢	大鉢	無台盤	有台盤	杯	碗	
III 2																			接	無台杯	有台杯	小鉢	大鉢	無台盤	有台盤	杯	碗	
IV 1																			接	無台杯	有台杯	小鉢	大鉢	無台盤	有台盤	杯	碗	
IV 2																			接	無台杯	有台杯	小鉢	大鉢	無台盤	有台盤	杯	碗	
IV 3																			接	無台杯	有台杯	小鉢	大鉢	無台盤	有台盤	杯	碗	
V 1																			接	無台杯	有台杯	小鉢	大鉢	無台盤	有台盤	杯	碗	
V 2																			接	無台杯	有台杯	小鉢	大鉢	無台盤	有台盤	杯	碗	
VI 1																			接	無台杯	有台杯	小鉢	大鉢	無台盤	有台盤	杯	碗	
VI 2																			接	無台杯	有台杯	小鉢	大鉢	無台盤	有台盤	杯	碗	
VI 3																			接	無台杯	有台杯	小鉢	大鉢	無台盤	有台盤	杯	碗	

図4 挽物消長表

図5 盤口径分布

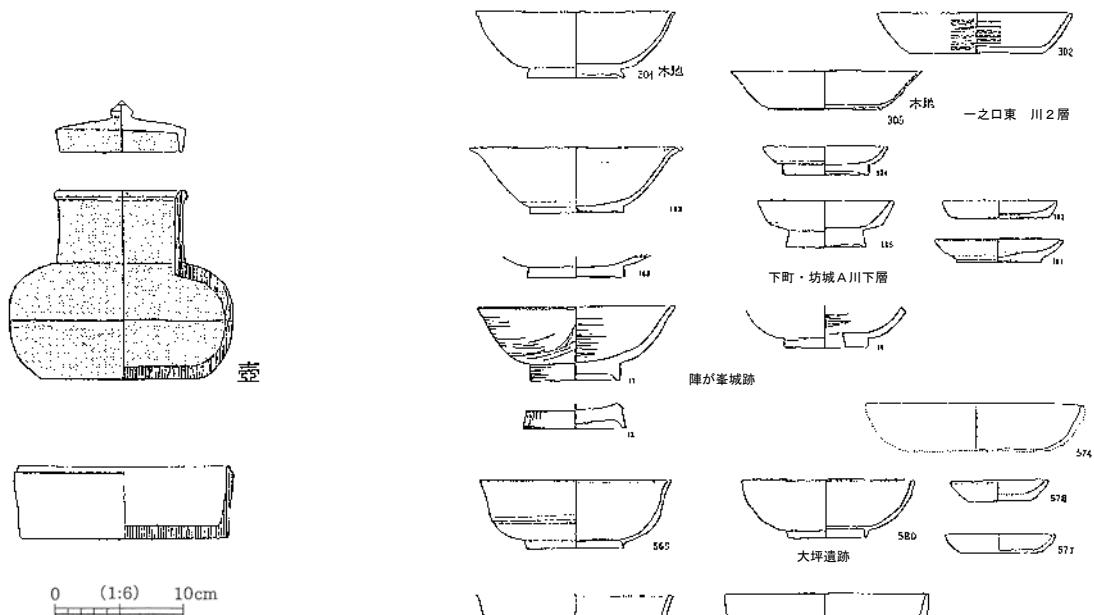


図6 八幡林遺跡出土漆器

本節	年代	参考	春日1999
1段階	1古	飛鳥1	I 1
	1新		I 2
	2		I 3
	3 梯子谷窯跡	飛鳥IV	II 1
	4 一		II 2
	5 下ノ西SD25 延命寺SD1700	神龟五年(725) 天平九年(736)	III 1
2段階	6		IV 1
	7 滝寺7号窯跡 今池SD102	西暦775年上限 前G(北埼京)	IV 2
	8 一		IV 3
	9 駒首湯河川 根廻堂IXa層	天安元～貞觀元年 (857～859) 貞觀五年(863)年	V 1
	10 馬越SE14	元慶(877～885)	V 2
			V 3
3段階	11 一	0～53	VII 1
	12 門新SD152	延長五年(928)	VII 2
	13		
	14 一之口東SD11	丸石	VII 3
	15 古		VIII

図9 時期区分（春日2010を改変）

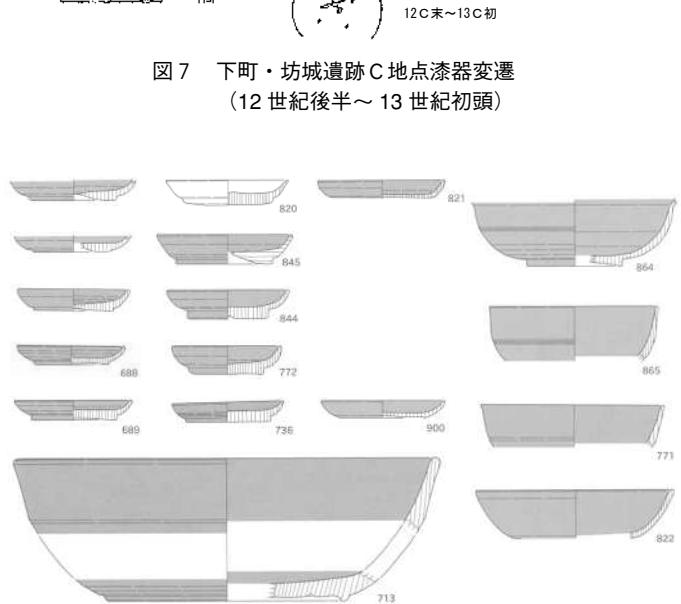


図8 住吉遺跡出土漆器（13世紀前半）

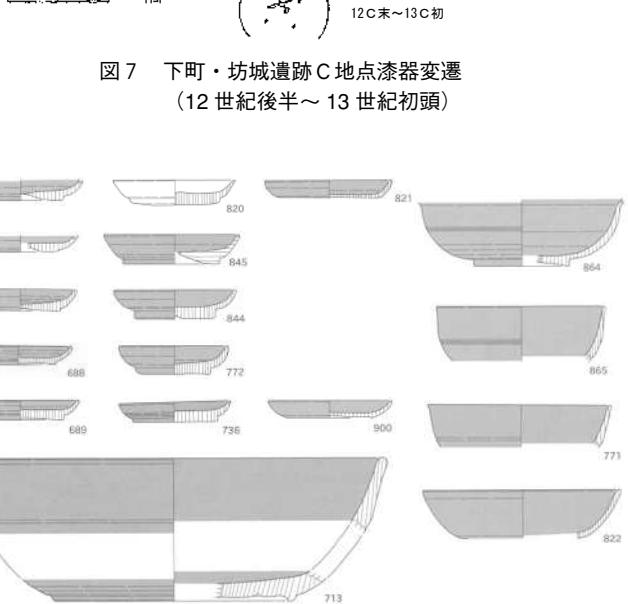


図8 住吉遺跡出土漆器（13世紀前半）